

探訪！菅田庵

庭園文化研究分科会 原 裕二

1. 菅田庵へのいざない

出雲流庭園のルーツは、松江市菅田町の有澤山荘菅田庵にあると考えている。

そのような折り、今年度は分科会でじっくりと案内していただく機会があった。

今まで知らなかった興味深い内容が多く、大変有意義な時間を過ごすことができた。その折に感じたことを順不同に記す。

本来なら菅田庵の歴史や沿革から詳しく述べるべきだが、紙面の都合上、割愛する。巻末に有澤山荘菅田庵や松江市：史跡及び名勝菅田庵保存活用計画のホームページ、小口基実・戸田芳樹(1975)などの出典を添付したので、そちらを参照していただきたい。

2. 菅田庵の土は赤い

次ページの図1に現地調査を行って作成した見取り図を示す。位置関係や縮尺にはある程度の誤差があり、筆者の主観を記載した書き込みも含まれる。

見学者駐車場から林の中に入ると、苔に覆われた見学者用園路が現れる。ありふれた住宅地の風景から、静かなたたずまいへと徐々に変化していくのが感じられる。

このあたりで丘陵斜面を見ると、土があざやかな赤色であることがわかる。これは、アルカリ玄武岩火砕岩の火山礫凝灰岩が分布しているためである(図2、図3、図5)。

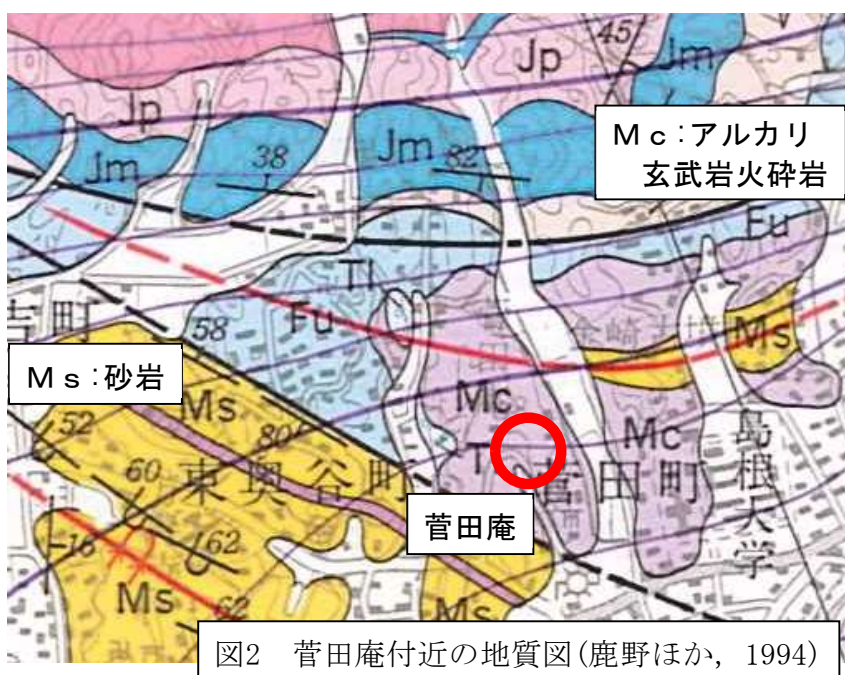
その昔、菅田庵から島根大学一帯が内湾であった頃、楽山公園あたりから溶岩が噴出し、水蒸気爆発を起こしながら堆積した。

玄武岩は花崗岩(みかげ石)などと比べて、鉄やマグネシウム、カルシウムを多く含む。したがって風化が進んで土砂状になった場合、その土は酸化してかなり濃い赤色を示す。

松江城山付近に分布する松江層砂岩も、鉄分が多い箇所はある程度赤くなる。しかし、その色合いは橙色から褐色に近い。

余談だが、マグマが地層に貫入してできた熱水には、鉄などの多くの元素を含み、温度が下がると、水酸化第二鉄とケイ素、アルミニウムの混合物を生じることがある。これはベンガラや陶芸釉薬の原料として利用される。

石見銀山で産出し販売された万能薬「無名異」も同様に生成された(成田, 2018)。



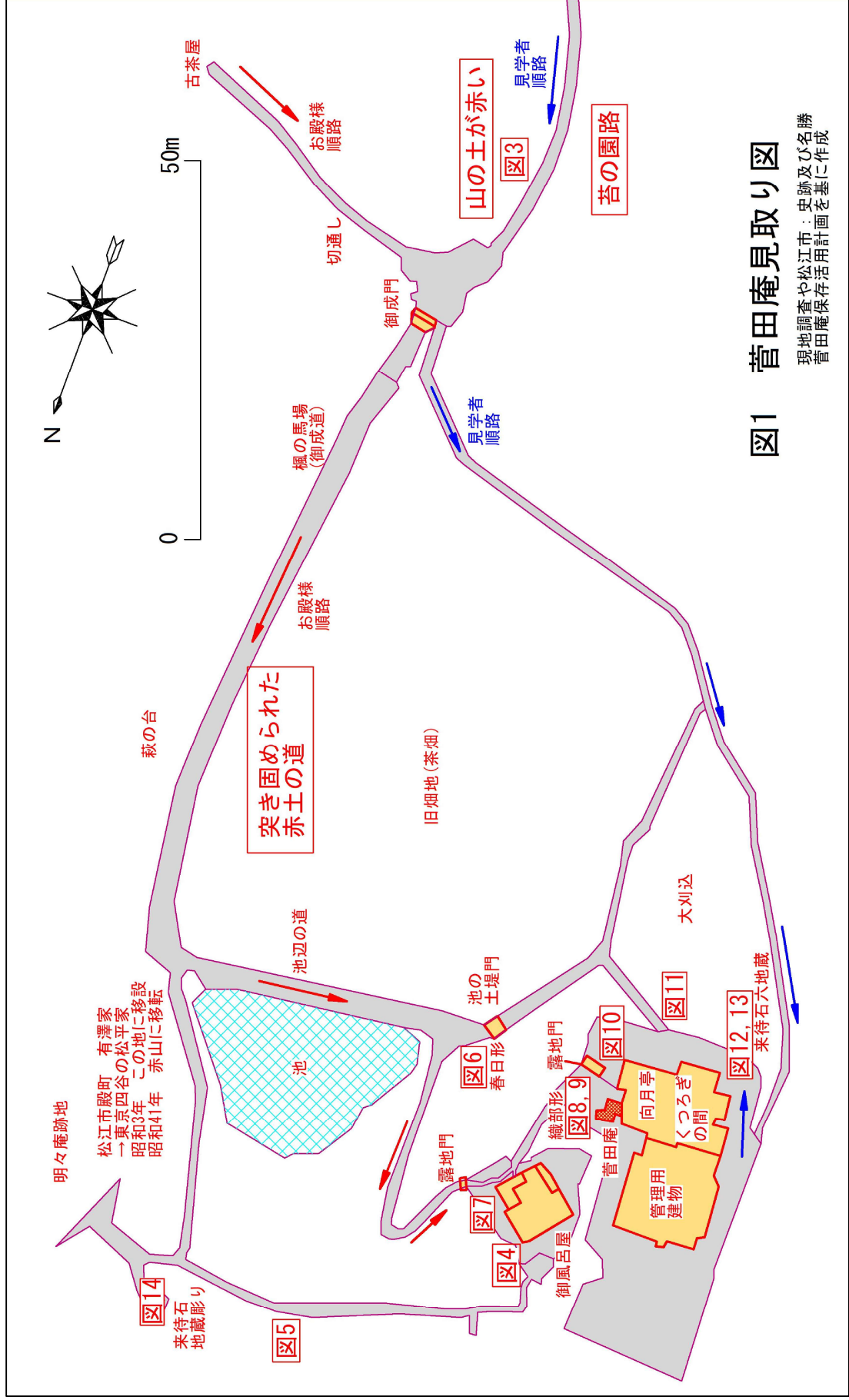


図1 菅田庵見取り図

現地調査や松江市：史跡及び名勝
菅田庵保存活用計画を基に作成



図3 園路の斜面で見られる赤土
アルカリ玄武岩火砕岩風化土

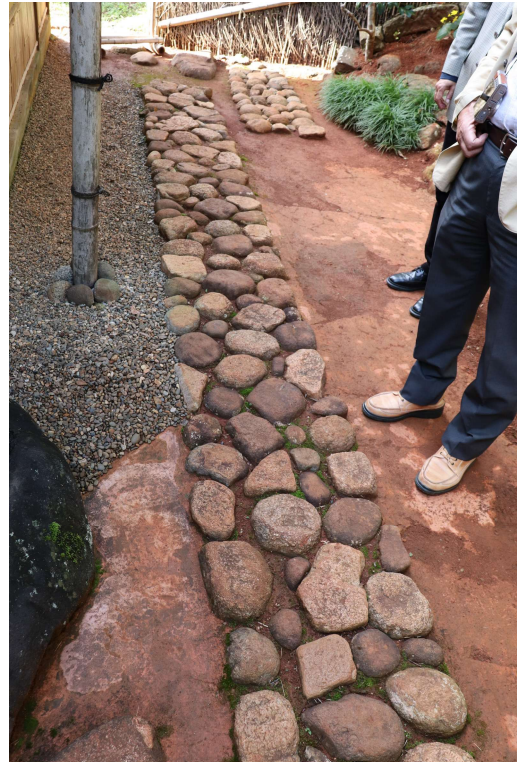


図4 御風呂屋の北側
園路、御成道、露地、建物の
床下叩き土は、地山の赤土が
用いられている。



図5 アルカリ玄武岩火砕岩

菅田庵では、この赤土を園路や御成道、露地に敷いて突き固め、一種の舗装代わりに用いられている。建物の床下叩き土にも使われていたらしい(松江市ホームページ)。

アスファルトやコンクリートではないため、多少凹凸があって、歩くときはしっかりと足元を確認しなければならない。亀裂や剥離が生じた場合は、そのつど補修して維持管理は必要になる。しかし、十分に締め固められているので、それなりの耐久性を有する。

色彩の面からは、薄い赤色に統一され、灰褐色の建物との調和がとてもよい。色相やトーンがそろい、中程度の明度・中程度の彩度である中間色を中心にまとめられている。

類似性の原理(近似色相の組み合わせは調和しやすい)、なじみの原理(自然界で見慣れている組み合わせは心地よい)を意識した配色技法が用いられている。

3. 菅田庵の石灯ろう

松江市歴史的風致維持向上計画「菅田庵を構成する諸要素」として計上されている灯ろうは7基ある。今回見たのは、そのうち6基である。詳細は、図6～11及び表1に示す。

これらの石灯ろうは、三刀屋石できている。

三刀屋石は別名、白御影(しろみかげ)とか大東花崗閃緑岩と呼ばれ、三刀屋～木次～大東に広く分布する。



図6 春日形灯ろう
池の土堤門の脇



図7 織部形？灯ろう
御風呂屋の北側



図8 織部形灯ろう
御風呂屋の北側



図9 織部形灯ろう
竿に地蔵の浮き彫り



図10 立ち灯ろう
菅田庵中門の脇



図11 立ち灯ろう
大刈込の石段

白くぼったりとした印象であり、粒が粗い。数cmの暗青灰色の丸い模様が必ずあるので見分けが付きやすい。来待石と並んで、出雲国を代表する石材である。

向月亭及び菅田庵は、寛政4年(1792)頃には完成していたと言われている。

月照寺に眠る松江藩主五代宣維(のぶずみ)の墓が、地元の三刀屋石を使い藩内の石工によって作られるのは、享保16年(1731)である。

七代治郷(不昧)公の時代に、ここで使われていることと矛盾しない。これらの灯ろうは、菅田庵建築当初か、その直近のものと推定される。

この時代の石造物は神社の鳥居を除くと、来待石製が多く、花崗岩製は格式の高い神社仏

閣や屋敷で用いられた。このようにまとまった形で残されているのは、不昧公ゆかりの茶室である所以であろう。

表1 菅田庵の石灯ろう

番号	位置	形式	材質	備考
図6	池の土堤門の外側	春日形	三刀屋石	大型、笠がわずかに破損
図7	御風呂屋の北側	織部形？	(大東花崗閃緑岩)	火袋が丸形
図8	菅田庵の北側	織部形	・ 白いご飯に刻みのりの破片をふり	竿に地蔵が陽刻
図9	露地			
図10	菅田庵中門の脇 (向月亭側)	立ち灯ろう	かけたような色 ・ 粒が粗い	大型、やや風化 図11とは異なる
図11	向月亭前庭と大刈 込の間の石段	春日形？若葉 形？大平形？	・ 数cmの暗青灰色 の丸い模様	大型、新鮮
図12	向月亭前庭	六地藏形	来待石	火袋に陽刻
図13	くつろぎの間の前			中台は三刀屋石

4. 六地藏灯ろうの謎

見学者順路から向月亭の前庭に入ると、消火栓の横に来待石の六地藏型灯ろうがあることに気がつく(図12, 13)。

六地藏は仏教において、六道(天道、人間道、修羅道、畜生道、餓鬼道、地獄道)の思想に基づいて地蔵菩薩の像を6尊並べて祀ったものである(ウィキペディア)。日本では11世紀頃、各所に祀られ庶民の信仰を集めた。

お地藏さん6尊をそれぞれ個別に並べた形はよく見かけるが、同一の石柱に刻んだものがたまにある。

向月亭の六地藏灯ろうは、いつ頃作られたものか？

島根県内にある同じ来待石製の灯ろうと比較しながら、製作年代を推理する。この六地藏は、正確に言うと、石幢(せきどう)と呼ばれるものである(林, 2022)。

もともとは屋内の仏堂内の仏具で、仏の威徳を称え先祖を供養するための幡のようなものだった。それを鎌倉・室町時代以降、屋外で灯ろうに似た石塔で表すことが流行した。

一般には火袋部分には窓がなく、六角柱の形が多いように思う。また材質も花崗岩や安山岩、硬質砂岩で、耐久性のあるものが選ばれる(たとえば浅草寺の六地藏-小松石-安山岩)。

ところが、向月亭の六地藏は地蔵菩薩が火袋に陽刻されている。しかも3箇所、長方形の透かしが入っている。材質が軟らかい来待石の火袋に窓を開け、六地藏を陽刻すると、強度はかなり落ちると予想される。

なぜそのようなリスクの高いことをしたのか、長い間疑問に思っていた。

どうやら明治の初め頃、廃仏毀釈に際し、窓を開けて「これは仏教には関係なく、ただの灯ろうです。」とアピールするためだったらしい。

そのため彫り跡の状態が相対的に新しく見える。もともとは窓がない石幢タイプであった。竿にも丸孔が3箇所ほどあるが、これは別の理由と思われる。



図12 向月亭 六地藏



図13 向月亭 火袋の六地藏



図14 近くの丘陵にある六地藏の墓

図14は近くの丘陵地にある六角柱形の石幢である。尼子vs毛利の戦いにまつわる墓と言われている。かなり古いように見える。これには窓がないため長く持ちそうだが、それでも表面の剥離が進んでいる。

図15は松江市栄町にある圓成寺の六地藏である。慶長9年(1604)とされている。竿に地藏が刻まれるタイプであり、来待石であっても保存状態はややよい。しかし下部の方が浸食されていて、文字は既に判読不能である。

月山富田城の麓、巖倉寺には、堀尾吉晴公の墓がある。慶長16年(1611)とされている。

図16は、その五輪塔の前にある石柱である。

玉垣内の灯ろうが文化8年(1811)であり、墓そのものに補修の跡があるのに対し、この石柱だけ格段に古さを感じる。石幢の残骸ではないかと思っている。文字や模様は確認できない。

このように、来待石製の石幢や石柱が400年以上も残ることは非常にまれで、現存するものは風化が進んで、かなりダメージを受けている。

これらのことから、向月亭前庭の六地藏形石幢には、2とおりの製作年代が考えられる。



図15 圓成寺六地藏 慶長9年(1604)



図16 堀尾吉晴公の墓 慶長16年(1611)

(1) **推理1** 製作年代は、江戸時代初期の1600年代初め

長い間、屋内にあったかまたは風雨が直接当たらない屋外にあったはず。この場合、元はどこかの寺院にあった、有澤家に代々受け継がれていた、何かの事情で他家から譲り受けた、などと思いつくが、想像でしかない。

(2) **推理2** 製作年代は菅田庵や向月亭と同じ1700年代末

風化の状態から、230年ほど経過したと見ても不思議ではない。

しかし1700年代末だとしたら、なぜ当時はやりの三刀屋石で作らなかったのか？

きちんとした台がないのは、なぜだろうか？長年の間に失われたのか。

また三刀屋石の中台を境に、火袋から上の部分と竿から下の部分は、材質や製作年代は同



堀尾吉晴公の墓 全体図

じでも、別の部材であった可能性がある。灯ろうの竿にいくつも穴を開けるであろうか。くつろぎの間の前にある三刀屋石の手水鉢は、かつて鳥居の柱であったものを転用したと伺っている。同じように再利用をはかったかもしれない。

想像はつきないが、確証はない。誰がどのような意図で配置したかも不明である。根拠はないが、その起源は江戸時代初期にありそうだ。

5. 視察で感じたこと

寛永15年(1638)、松平家が松江藩主となると、初代有澤直玄(なおはる)公は初代直政公から菅田の山を拝領した。

その1600年代中期から約400年、寛政4年(1792)に菅田庵ができたとすると約230年、明治維新・廃藩置県で松江藩が消滅してから150年間、代々、菅田の山を大切に守り伝えられてきた。

その間、藩財政の悪化、明治維新、廃仏毀釈、太平洋戦争前後の混乱、災害の頻発、地球温暖化など、様々な障害があったことと推しはかることができる。

中でも最も大きな脅威は、人々の無関心だろう。流行や興味が変わって、人が顧みないようになると、失われていくのは速い。

この宝物をしっかりと維持管理し伝えてこられたおかげで、私たちは現在このように鑑賞することができる。

先人に敬意を表しつつ、今後も引き続き調査を進めて考えていきたい。

6. 謝辞

今回の視察にあたり、有澤山荘の皆様には多大な御協力をいただくとともに、大変興味深いお話を伺うことができました。ここに記して感謝申し上げます。

なお、ここであげた施設のうち、非公開の箇所があります。そのような場所に無断で入ったり、写真を撮ったりすることは違法です。十分にご注意ください。

7. 参考文献

林秀樹(2022)：圓成寺庭園で庭の見せ場「景趣絶佳」を探る，令和3年度研究報告，島根県技術士会，56-61.

菅田菴(2023/11/10 閲覧)：有澤山荘菅田菴，<https://www.kanden-an.jp/>.

鹿野和彦・山内靖喜・松浦浩久・豊遙秋(1994)：松江地域の地質，地域地質研究報告(5万分の1地質図福)，地質調査所，67-73.

小口基実・戸田芳樹(1975)：出雲流庭園，小口庭園グリーンエクステリア，61-67，70-73，80-84，109-114，122-125，128-137.

松江市(2023/11/10 閲覧)：史跡及び名勝菅田庵保存活用計画，https://www.city.matsue.lg.jp/soshikikarasagasu/bunkasportsbu_bunkazaika/rekishi_bunkazai/3/2/2702.html.

明々庵(2023/11/10 閲覧)：明々庵のご紹介，<http://www.meimeian.jp/index.html>.

成田研一(2018)：石見銀山薬石「無名異」の成り立ちと展開について，薬史学雑誌，53，2，104-107.

ウィキペディア(2023年11月22日閲覧)：<https://ja.wikipedia.org/wiki/六地藏>